

作物別技術交流集会報告

トマト・れんこん・メロン

らでいっしゅぼーや農産開発課では、5月から6月、3回の作物別技術交流集会を開催しました。トマトとメロンはともに果菜類であり、味と施肥設計の分かちがたい関係をいかにコントロールするか、がポイントとなっていたようです。出荷時期とも重なり、シビアな技術集会でした。がんばりましょう！

Report

トマト

省エネでおいしいトマト！

5月25～26日、全国から生産者32名が埼玉県妻沼町に集合し、トマトの技術交流集会が開催されました。テーマは「エネルギー低減」と「食味の向上」です。

■エネルギー消費の低減を

「らでいっしゅぼーやは省エネルギー型の農業を応援します。これは大切な原則ですから、みなさんの現在を出発点に、低減化に向けたアプローチをしてください」（農産管理課・横山課長）。

環境保全型農業を推進する。らでいっしゅぼーやの大きなテーマです。作型によっては冬期間のエネルギー消費が多いトマトの栽培について、よりエネルギー消費の少ない栽培技術を確認してほしい。これがらでいっしゅぼーやからの提案でした。

当日は資料として、らでいっしゅぼーや農産管理課が一昨年より調査を開始している「エネルギー消費カード」により、トマト栽培に使用している重油の消費量のリストが配布されました。エネルギー消費量は作型や地域などでも違ってきます。このことから作付け時期を（暖かい時期に）ずらすなどの意見が出されます。

重油の使用量そのものを減らす方法として、ジャパンバイオフィームの小祝さ



水分過剰は葉かび病などの病害発生も助長する。岡村文男さん（左）、丸岡文雄さん（右）



生産者さん持参のトマトたち。「こっちのが水っぽいかナ？」

んから事例の報告がありました。愛知県で小祝さんの指導のもとトマト栽培を進めているファーマーズクラブ愛知では、ハウス内のビニール構造を二重に改良して、温水を灌水チューブから送り地温の低下を抑えています。従来の加温にこの技術を取り入れることにより、重油使用量の削減に成功しているとのこと。今後は温水を風呂釜で沸かす方式からハウスの屋根部分に太陽熱温水器を設置するものに変え、更なる重油代の削減を計画しているとの話でした。

■おいしいトマトは水管理？

おいしいトマト作りには水管理が不可欠。小祝さんの講義の主題です。メロンでも同様ですが、水を無制限に吸い込んだ果実は水っぽく、どうしても甘味や旨みが充実しません。また土壌中に蓄積された窒素などの成分が過剰に存在すると濃度障害をおこしてしまいます。そこで水量の制限が必要になってくるのですが、それには根圏の水分の状況や、地下水位の把握も不可欠とのこと。また水分の過剰は食味の低下だけでなく、葉かび病などの病害発生も助長し、健康なトマト作りを進める上でも留

意すべき重要なポイントであることが確認されました。

小祝さんが指導している愛知の事例では、灌水チューブは固定せず、生育と共にずらす方法を取っています。定植した時は根元の近くに設置して、その後3段階に分けて株から20cm程度まで離していく。こうすることにより根元は乾燥して病気や腐りに強くなり、根が外側へ誘導されていき根張りを良くするとのこと。後日この生産者に聞いたところ、改善により収穫量が増え、病害の低減にも役立っているとのことでした。

れんこん

無農薬がイイ！

6月1～2日、全国から生産者15名が集まり、れんこんの作物別技術交流集会が開催されました。場所は茨城県稲敷郡桜川村。テーマは「無農薬栽培」です。れんこん栽培の無農薬化に向け、現状をどう改善していくかが話し合われました。

■敵はアブラムシ

れんこんは農薬の使用回数が少ない作物とはいえ、なかなか「無」にできない現状。課題はアブラムシ防除。有効とされる防除手段は「深水」+「窒素を抑えた施肥」と言われています。しかし全参加者15名中無農薬化を実施できている方がまだ8名というのも事実。今回圃場を見学させていただいた、山田庄三さん（あゆみの会）も「何度も壁にはぶつかったが、小さい畑で実験を繰り返して初めて無農薬化に成功」。一方、同じ会の諸岡嘉光さんの畑では困難というお答え。それはまだ客土をした新しい田んぼを使っているため、今は土を肥沃にしている段階で、肥料（窒素）の投入量を抑えるのが難しいのです。



トマト集会。味の向上に加え「エネルギー消費」もテーマに。